

明治の初めに木曾谷模型は何故作られたのか

資料館スタッフ 山口 登

1. はじめに

木曾谷模型は、長野県木曾郡木曾町の御料館に展示してある木製のジオラマで、明治14年(1881)に東京・上野公園で開かれた第二回内国勸業博覧会に、内務省山林局木曾出張所が出品したものである。博覧会終了後は、農商務省山林局、宮内省御料局を経て、明治25年(1892)に伊勢神宮の神宮農業館に下付され、110年後の平成2年(1990)に故郷の木曾に戻った。

今から140年前の木曾で何故このような巨大なジオラマを作ろうとしたのか、そして現代まで壊れもせず御料館に展示されているのはどうしてか、その謎解きがこの研究報告のテーマである。

2. 木曾谷模型との出会い

平成21年(2009)6月に、筆者が当時非常勤で勤務していた旧木曾山林高校の空き教室で木曾谷模型を展示することになった。それが木曾谷模型との初めての出会いで、この展示中に木曾谷模型の組立と解体にも立ち会い、その内部構造を観察することができた。この時のメモ帳には、「何故このような大きな模型を作ったのか、発案者は誰か、どのくらい正確なのか、元になった地図や絵図があったのか」と多くの疑問を書きとめてあり、この謎を解明したいと考えたことがこの研究の出発点である。

その後、木曾の林業・林政を調べる機会があり、徳川林政史研究所の『研究紀要』を閲覧した際に、田原昇の「近代木曾林業と第二回内国勸業博覧会」、安藤茂良の「近世木曾材の伐木・運材の史料について」の論文に出会った。木曾谷模型と思われる模型が、内務省山林局木曾出張所(以下、木曾出張所)によって第二回内国勸業博覧会に出品されたこと、及び江戸時代の享保年代(1716~1736)に行われた木曾谷の測量とその結果をもとに作られた絵図の存在がわかり、木曾谷模型研究の方向が見えたのだった。田原は木曾谷模型の存在を推測していたが、実物が100年以上も経た現代に残っていることは知らずにこの論文を執筆し、筆者がこの存在を徳川林政史研究所経由で知らせたところ、大変な驚きようであった。

中部森林管理局に保管されていた木曾谷模型等に関する山林局本局と木曾出張所との間で交わされた文書が、国立公文書館に収納されて永久保存されることになり、筆者も茨城県つくば市にある国立公文書館つくば分館で原本を閲覧し、この研究の参考とした。

また、木曾谷模型制作者の氏名が判明していたことから、その子孫である木曾町の岩屋旅館の女将^{おかみ}と出会えたことがこの研究を前進させた。現在も旅館ロビーの一番奥に、第二回内国勸業博覧会における木曾谷模型の褒状^{ほうじょう}(行為をほめるこ

とを記した書面)が掲げてあり、その褒状を近くの写真館で複写することを快く承諾していただいた。岩屋旅館では、その他の木曾谷模型に関連する史料は見つからなかったが、この褒状によって先祖が明治時代に木曾谷模型を制作したことを承知していたが、まさか現存しているとは思わなかったという。

3. 木曾谷模型の概要

木曾谷模型の大きさは、南北方向 5m10cm、東西方向は一番広いところで 3m20cm。木曾産の天然ヒノキ(以下、木曾ヒノキ)の大きささまざまな 29 個の部材をつなぎ合わせて、そこにノミや彫刻刀を使って地形を彫ったものである(写真1・図1)。



写真1 木曾谷模型の全景



図1 木曾谷模型の平面図

長野県の西部に位置した西筑摩郡(現在の木曾郡になる前の行政区画)をその範囲とし、当時の西筑摩郡の面積は約 1,850km²で香川県の面積 1,876km²に匹敵した(図2)。木曾谷は江戸時代より尾張藩に属していたが、明治維新後の長野県の発足で明治12年(1879)に西筑摩郡(16ヶ村)となり、昭和43年(1968)に木曾郡に改称したが、隣接市との合併、越県合併及び平成の合併で2021年現在の面積は 1,546.17km²(3町3村)となった。

木曾谷模型の東に中央アルプスとその主峰である木曾駒ヶ岳、西に独立峰の御嶽山、南は恵那山、北は木曾川源流の鉢盛山、峰々に囲まれた谷の中央を木曾川が北から南へ流れ下り、御嶽山を源流とする王滝川が木曾川と合流する。また、北部の信濃川水系の奈川と奈良井川は、松本平へ流れ下る。

これらの山塊や河川・支流を彫刻で表現している木曾谷模型の面積は、8.7 m²(約5畳)、外縁の長さは 12.7m、奈川下流点と恵那山間の長さ 4.7m、御嶽山と木



図2 西筑摩郡図

曾駒ヶ岳間の長さ 2.5m、最高点(台座を除く)は御嶽山頂上の 67cm、次に木曾駒ヶ岳頂上の 51cm、最下点(台座を除く)は木曾川下流の 2cm。木製のジオラマとしては日本国内で最大級のものとする。

木曾谷模型の構造は、29個の部材による木彫、木枠、骨格材で構成され、外縁を木枠で囲い、その内部は地形の高低に合わせた骨格材を骨組みとして土台を形成し、その上部及び床面から木彫の部材をパズル状にはめ込んで固定している(写真2、写真4)。また、御嶽山の下部に位置する木枠内側には、「信濃国西筑摩郡福島村 住/作人 児野嘉左衛門 73歳」と制作者の氏名住所年齢が書き込まれている。(写真2の[内部骨組み])

児野嘉左衛門(以下、嘉左衛門)は、岩屋旅館の当主であり、御嶽講の行者だった。この制作を依頼したのは内務省山林局の木曾出張所で、木曾谷模型は嘉左衛門と木曾出張所の共同制作物というべきものであり、第二回内国勸業博覧会ほうじょうの褒状は、木曾谷模型を制作した嘉左衛門を称えている(写真3)。



写真2 木曾谷模型の構造



「経画其宜キニ適ス畜ニ工技ノ良巧ノミナラズ最モ山林家に裨益ヲ與フ頗ル嘉スヘシ」
 (計画そのよろしいだけでなく、工技の良巧のみならず、最も山林家のためになることをあたえたこと、すこぶるよしとすべし)

写真3 木曾谷模型の褒状

現在の木曾谷模型は、森林帯は緑、御嶽山と木曾駒ヶ岳の高山帯は白、低地は茶、河川・溪流は青色に着色されているが、制作当時の色の記録は無く不明である。なお、第二回内国勸業博覧会への出品時には、樹木に似せるため山腹に苔蘚(御嶽山近傍の山林に生える万年草)を敷き詰めたといわれる。

材料のヒノキは、木材の肌目の美しさ、加工性、耐久性が良いなど優れているが、特に木目が細かく質感の良い木曾ヒノキは、伊勢神宮などの社寺建築に用いられ、仏像、能面などの彫刻材にも適していることから、材料として選択したと考える。施工性や経費を考慮すれば、紙や粘土も選択できたが、あえて手間のかかる木曾ヒノキを選んだことは、木曾ヒノキに対する絶対的な自信と愛着があったに違いないと思う。

西筑摩郡全図と木曾谷模型の外周線図を重ね、2つの図の御嶽山と木曾駒ヶ岳のピークが一致するように縮尺を調整した(図3)。一見してその違いは大きく、木曾谷北部が実際より狭く南西側が広く作られ、地図上における誤差は非常に大きい。

また、木曾谷模型の面積と西筑摩郡の実面積から算出した木曾谷模型の縮尺は、1/14,600であるが、その縮尺が部分的に大きく違う。しかし、実際のジオラマを見ると、巨大な山並みのもつ迫りに圧倒される。それは彫刻の巧みさであり、実際に木曾の山々を隈なく歩いている人が作った本物の力である。



図3 西筑摩郡図と木曾谷模型外周の比較

4. 木曾谷模型と第二回内国勸業博覧会

明治の日本は、博覧会が大きな盛り上がりを見せた時代であった。慶応3年(1867)にパリ万博があり、日本はそこにはじめて参加して大きな刺激を受け、内国勸業博覧会の開催につながっていく。

第一回内国勸業博覧会は、西南戦争のさなかの明治10年(1877)に内務省主導で開催された。第二回は西南戦争が終了し、その膨大な負債をかかえた不況の時代であったが、殖産興業を旗印に明治14年(1881)3月1日から6月30日まで東京の上野公園で開催し、会期中の入場者は82万人で第一回に比べて80%増であった。

この博覧会への出品要請は、明治12年(1879)12月24日に内務省山林局から木曾出張所に通達され、木曾谷模型の他に木曾産の木材19種(皮付板、柁目板、板目板、木片用材)を樹種ごとに解説が付された。伐木や造材に使用する器具類、山林から採取される虫類・石類・土砂・茸類・藁草、その他諸製品等6種類27品目が出品された。

木曾谷模型制作の詳細な過程は不明であるが、国立公文書館つくば分館が所蔵

する『博覧会一件録』・『明治十三年度第二回博覧会経費受払簿』・『明治十三年七月博覧会出品経費精算簿』等の、木曾出張所と山林局博覧会事務掛との連絡文書からその経過を探った。

明治12年(1879)の早い時期に木曾出張所から出品に係る経費の見込額が山林局に上申され、明治12年(1879)度の経費415円10銭2厘が示達されていたことから、12月の出品要請の通達前に木曾谷模型の制作に必要な準備作業に着手したと推測する。

主材料の木曾ヒノキは、明治12年(1879)～13年(1880)前期に福島村の中村岩次に運搬を依頼し、37円50銭の運送費を支払っていることから、既に貯木場で乾燥が進んだ木曾ヒノキから必要な数量を選んでその都度作業場まで運搬し、木杵・骨格材の木取と組み立ては、その直後に始まったと推測する。その後、明治13年(1880)6月30日に、嘉左衛門に彫刻費として350円が支払われていることから、この時期に組立と彫刻が完了したと考える。明治13年(1880)9月28日付けで博覧会事務掛から木曾谷模型の搬入時に解説の添付を求める通知があったことから、彫刻が終わった木曾谷模型に木曾出張所の職員が手分けをして、各種の境界線・標記・解説を追加して、12月までには装飾がすべて終了したと推測する。この木曾谷模型の解説の書き込み・装飾作業等の経費が135円75銭支出された。

明治13年(1880)12月中に運搬経費111円57銭で内国通運会社が、東京上野の博覧会会場まで木曾谷模型を運搬した。内国通運会社とは、官営郵便の開始をきっかけとして、江戸の定飛脚問屋仲間が中心となって明治5年(1872)に設立し、その後全国的な輸送ネットワークが整備され、西筑摩郡内の各所にその支店や出張所が存在した。

博覧会出品に際して木曾谷模型にかかった経費を合計すると634円82銭(現代の貨幣価値に換算した場合諸説あるが約320万円と推定)で、全経費の82%を占めた(表1)。

表1 第2回内国勸業博覧会関連の精算額

種別	摘要	金額 円 銭 厘	備考
木曾谷模型	彫刻木材運送費	37 50	福島村中村岩次(貯木場から運送)
	彫刻費	350	福島村児野嘉左衛門(一括払い)
	装飾・解説等の書き込み	135 75	木曾出張所にて消費
	模型運送費	111 57 3	内国通運会社に委託(東京上野)
	小計	634 82 3	(支出総額の82%)
材鑑器具類他	諸備給(日当)	54 87 2	材鑑の挽割、虫・石・茸類等の採集手間賃
	需用費	31 38	材鑑を入れる箱代?
	運送費	45 68 4	材鑑運送費 8名
	出品器械費	3 53 6	鉋、鋸、墨壺、曲尺、斧、鉋
	電信料	65 5	山林局との通信
	小計	136 12 7	(支出総額の18%)
合計	770 95		

5. 木曾谷模型の制作者と制作方法

木曾谷模型の制作者である嘉左衛門は、江戸時代の文化6年(1809)生まれで、木曾町で江戸時代から現在まで350年続いてきた老舗の岩屋旅館の5代前の当主であった。御嶽山を深く信仰し各地からお参りに来る信者を御嶽山に案内する行者を家業の傍ら行っていた。御嶽山は山岳信仰の霊場として全国に多くの信者がいたが、一時その数が衰退したことから嘉左衛門は御嶽信仰の普及に努め、全国を行脚して講社の結集を図り、木曾谷中の奥まで精力的に布教し、信者の獲得に奔走した。また、書道・絵画・彫刻に秀でていたことから、郡内にも僅かながらその作品が残り、御嶽山の登山道に祀られた霊人像や、岩屋旅館の中庭のお堂には自らが彫った自身の座像が鎮座している。

嘉左衛門は木曾谷模型を制作した5年後の明治18年(1885)に死去したが、行者としての功績により明治29年(1896)御嶽山9合目に銅像が建立された。

嘉左衛門のことを知れば知るほど、幕末から明治の激動の時代の中を生き抜いた優れた人物の存在に驚いたのであった。なお、御嶽山の登山道には、御嶽講に所縁のある石碑や石像などが祀られ、それらの加工を生業とする彫刻師が御岳山麓の黒沢村(現在の木曾町)・王滝村に多数いた。

木曾谷模型の設計図や彫刻の下絵は現存していないが、その制作目標は1年以内で、タタミ約5畳分のヒノキ材に、西筑摩郡の地形の彫刻を施すことであった。

このプロジェクトが正式に動き出すのは明治12年(1889)12月であるが、すでにその1年くらい前から山林局と木曾出張所の間で出品物についての検討や実施手順の打合せは進んでいたと考える。そこでの結論は、「木曾谷模型を彫刻するとすれば、木曾の山を知り尽くしていて、かつ石像などの彫刻で経験豊富な嘉左衛門にまかせるのがよい」ということになったのではないかと推理する。

木曾出張所と嘉左衛門の関係は、地元出身の所員(御雇)の中に顔なじみがいた可能性もあるが、明治初年頃の田舎町であるから山林局から単身赴任している職員や、短期に出張してくる職員がいることを考えると、嘉左衛門が主人をしている岩屋旅館の存在は大きなヒントになる。あの時代、役所の飲み会は旅館でやるというのが定番であろう。場合によっては下宿がわりに旅館を利用していた所員もいたかも知れない。当然、嘉左衛門とは顔なじみになって、四方山話の中で御嶽山、伐木運材、霊人像の彫刻のことなどが伏線となって、この木曾谷模型を作ろうという話に発展したのかも知れない。

嘉左衛門は、行者の中では年齢的にも実績からも指導的な立場にあったから、御岳山麓の彫刻師や福島村(現在の木曾町八沢と上ノ段地区)で木工関係の仕事をしている職人らを集め、各自の仕事を采配し材料の運搬や作業場所の確保などの準備を進めたと推理する。まず明治12年(1879)中に縮尺の小さな模型を作って、木曾ヒノキの割材の組み合わせ方を検討し、職人の割当も考えたのではないかと推測する。

また、眺望の良い山の頂上や峠に立って、尾根筋や沢筋を俯瞰して彫刻するイメージを描いたのではないかと推量する。絵図ではあまりにも縮尺が小さいので、紙に方向別にスケッチをしてそれを職人に渡したかも知れない。木曾の職人達に

とって、大掛かりな木曾ヒノキの彫刻は制作意欲をかき立てるものではなかったろうか。

次に木曾谷模型の組み立てについて、その一部分を旧木曾山林高校の資料館に移設したときの写真から見ていく（写真4、写真2参照）。なお、同一方向を見た写真4の①が完成、②が組立中である。

木曾谷模型の構造は、大きく3つ（A・B・C）に分かれる（写真4①）。

木曾川の左岸にあたる木曾駒ヶ岳から南部の恵那山までの急峻な部分（A）は、大きなブロック材に斜面全体の地形が彫刻されている。かなり太い材を使っているが、南北方向は1本の木ではなく途中で繋いでいる（写真4②③）。

（A）ブロックを左側の作業者が手で押さええているところと右側の作業者の手元に、ブロックの切れ目がわかる（写真4③）。この（A）は大きな材料で、木曾川から中央アルプスの稜線まで一つのブロック材で済ましている。

木曾川の右岸一帯は、手前から3つの山域が見て取れるが、一番奥が御嶽山を囲む大きなエリア（B）である（写真4①）。写真2は、（B）の拡大写真で、上部彫刻がはっきりわかるが、ここは横の広がりも高さも一つのブロック材で作るには大きすぎるので、写真2 [内部骨組み] のように、上部部材を載せるための骨組みをつくり、そこに彫刻をしたブロックをのせるようにしている。

御嶽山上部のブロックもさらに二つに分かれていて、山頂部だけ三角の帽子のように別ブロックになっている（写真4④）。3段構造である。下からすべてブロック材で積み上げると、大きくて重くて運搬が困難になることを避けるための工夫であろう。横方向も巾が広いので二つに分けてあるが、写真2の上部彫刻写真をよく見ると、その継ぎ目が



写真4 木曾谷模型の組立

大きくて重くて運搬が困難になることを避けるための工夫であろう。横方向も巾が広いので二つに分けてあるが、写真2の上部彫刻写真をよく見ると、その継ぎ目が

御嶽山の右下を北方向に向かって山壁の色の変わり方でなんとか判別できる。

中央の木曾川沿いの低地(C)は、(写真 4③)で中央の作業者の足元にみえる青色の線が木曾川で、木曾川は全般的に川幅が狭く、両側から山が迫っているのが特徴である(写真 4①③)。写真 4③で、木曾川の縦断勾配(流れの勾配)を、右端のところと左の方の角になったところの床からの高さを比べると、わずかに左の方が上がっていることが見てとれる。急傾斜の連続のような山地の斜面と、川のゆるやかな勾配がひとつのブロック材の中に混在していることがこの写真でわかるが、これを彫刻によって表現するむずかしさは如何ばかりか。

以上が木曾谷模型の組み立てのごく一部を写真から推量したが、手順からいうと組み立ての最終段階で、左右から大きなブロックがセットされてきて、木曾川の部分で合わさる所でどうしても隙間が空いたり、段差が出たりして、その調整のための小さな木片を新たに削ってつけた箇所がいくつもみられた。

6. 元になった絵図はあったのか

木曾における山林の開発が本格的にはじまったのは豊臣秀吉の時代であり、当初は裏木曾(現在の岐阜県中津川市川上・付知・加子母)から伐出が開始され、続いて木曾谷最南端の湯舟澤(現在の岐阜県中津川市)に移った。ここは木曾ヒノキの巨木が多いところで、伊勢神宮の式年遷宮のたびに大材が伐出された。木曾川に沿って伐採は北上し、木曾谷南部の田立川・柿其川・阿寺川などの支流にも伐採の斧が入って行く。秀吉の時代から 100 年以上が経過した元禄時代末(1700 頃)には、木曾川の最大の支流である王滝川の上流地域まで開発が進んだ。

尾張藩の木曾材木役所の体制も盤石となり、享保の林政改革が進行する中で、平行して木曾山全山の測量が行われた。この測量は木曾山を 40 に分けてそれぞれの区域(現在の施業区)の川筋を遡る形で、枝分かれする小さな澤も 1 つ 1 つ名前を書き上げながら距離を測って記録し、享保 11 年(1726)に『木曾谷澤々町間記』の 3 冊にまとめられた。なお、町間というのは現在の測量という言葉にあたり、町間記は測量野帳というような意味になる。

この町間記のデータをもとに沢筋をメインにした木曾山の絵図が、残っているものだけでも 7 種類くらい作られたが、その中で古地図収集家の山下和正が発見した『木曾材木役所管内総圖』は、絵が鮮明で細部まで細かく描いていると安藤は評価している(図 4)。

この図は天明 4 年(1784)に写されたものであるが、安藤の研究から享保 12 年(1727)より前に作られているという。今回、木曾谷模型のカバーする区域を太い点線で、御嶽山・鉢盛山・木曾駒ヶ岳・恵那山、そして木曾川等の位置も補筆した。なお、この図の左下側の点線の区域外が裏木曾にあたる。

この絵図と木曾谷模型を比較したが、一致しているとは言い難く、同様に国土地理院の 1/50,000 地形図とも照合してみたが、各溪流を特定することはできなかった。

木曾谷模型の元になった絵図は特定できなかったが、その後、幕末になっていくつか新しい部分図が作られ、国立公文書館つくば分館が所蔵する木曾出張所の古文書の中には、森林の等級分け(1等～3等、禁伐林)や地目の種別(草里・元山)、林区界・郡界・村界等の表示を色付けした『東御岳中林区林部線之圖』や経路と各溪流を描いた『木曾林部出張員巡視線路繪圖』のような目的別の絵図があり、これらも木曾谷模型の制作に役立ったのではないかと推測される。



図4 木曾材木役所管内総圖

7. 木曾谷模型の履歴

この木曾谷模型は、ジオラマとして興味深いとともに、制作された明治の初めから現在に至るまで140年にわたって移転を繰り返してきたという稀有な履歴をもっている(表2)。

表2 木曾谷模型の履歴

期間	履歴
明治12年(1879)12月	内務省山林局から木曾出張所へ正式な出品要請
明治13年(1880)前半	木曾谷模型の彫刻
明治13年(1880)後半	木曾谷模型の装飾・解説文の作成・表示と梱包・運搬
明治14年(1881)3月10日～6月30日	東京上野公園の第2回内国博覧会で展示
明治14年(1881)7月～明治22年(1889)	農商務省山林局で保管(明治14年(1881)4月に内務省から農商務省に所管替)
明治22年(1889)～明治24年(1892)12月	御料局倉庫で保管(木曾官林の御料林編入)
明治24年(1892)12月～平成2年(1990)9月	伊勢神宮農業館で展示・保管(明治25年(1893)の農業館開館に伴い下付)
大正3年(1914)3月20日～7月31日	東京上野公園の東京大正博覧会で展示
平成2年(1990)9月～平成7年(1995)3月	福島営林署で修復後展示(神宮農業館の建て替えに伴い移管)
平成7年(1995)4月～平成21年(2009)6月	福島郷土館で展示(福島営林署閉庁に伴い町に移管)
平成21年(2009)6月～平成26年(2014)4月	旧木曾山林高校・資料館で展示(町から蘇門会に貸与)
平成26年(2014)4月～	御料館で展示(蘇門会から町に返却)

木曾谷模型は、東京上野の第二回内国勸業博覧会の終了後、農商務省(博覧会の会期中に山林局が内務省から農商務省に移管)山林局の管轄となり、その後御料局が引き継いで倉庫で保管していた。これは尾張藩が領有していた木曾の山林が、明治維新により国に所有が移り(官林)、明治22年(1889)に木曾の官林がすべて皇室財産としての御料林に編入されたことによる。

明治25年(1892)、伊勢神宮に農業館ができたことから、木曾谷模型は御料局から伊勢神宮徴古館の農業館に下付された。これは伊勢神宮の20年ごとの式年遷宮で、正殿の建替えに使う木材を江戸時代後半から主に木曾谷から供給してきたという関係があり、木曾谷模型を保管・展示するにふさわしいと御料局が判断したのであろう。また、農業館の設計・展示計画を指揮した「日本の博物館の父」と呼ばれ、第二回内国勸業博覧会の審査部長も務めた田中芳男の助言があったかもしれない。

大正3年(1914)に開催された東京大正博覧会の冊子『東京大正博覧会観覧案内』に、「林業館で人目を惹く木曾山林の大模型・これは木曾谷模型とは言いながら、一面に檜を植え付け、一見森々たる木曾山(木曾谷)を彷彿せしむるものであります」とあることから、東京大正博覧会に神宮農業館の木曾谷模型が出品されたと推測する。

東京大正博覧会は、大正天皇即位の奉祝と大正時代の幕開けを告げ、大正3(1914)年3～7月まで東京・上野公園で開催し、4カ月間で延べ約750万人が訪れ、ケーブルカーや日本初のエスカレーターが登場した。出品のため木曾谷模型を三重県伊勢から運んだことになるが、その経緯は不明である。なお、この冊子の中の「檜を植え付け」とは、神宮農業館で復元された際の樹木のミニチュアだ

と推測する。現在でも彫刻表面にミニチュアを埋め込んだと思われる穴の跡が無数に残っている。

大正10年(1921)の神宮徴古館農業館記念スタンプが押してある神宮徴古館農業館発行の木曾山模型絵葉書がある(写真5)。戦前における木曾谷模型の唯一の写真であり、恵那山から御嶽山方向を撮影したもので、妻籠、馬籠等の集落位置と男埴^{おだる}臨時備林・小川永久備林等の備林の名称とその区



写真5 木曾谷模型の絵葉書

域を見ることができる。永久備林・臨時備林とは、神宮式年遷宮の御造営用材を確保するため、明治39年(1906)以降の御料林でヒノキ大樹育成の区域を神宮備林として定めた。当時備林は永久と臨時の2種に区別し、永久備林は、永遠に用材を生産すべき地域として、向こう百年間は伐採をせず、その期間中は臨時備林によって必要を充たす計画とした。永久備林・臨時備林の表示は、伊勢神宮にとって重要だったと考える。白黒印刷のため色彩は判別できないが、御嶽山・木曾駒ヶ岳の高山帯は白色で、全体に光沢感があるが、樹木・人家・電信・橋梁等の小型の模型部材は確認できない。なお、太平洋戦争中に伊勢神宮も空襲を受けて被害が出たが農業館は無事であった。しかし戦後の農業館で木曾谷模型が展示された記録が見つからないことから、戦後はずっと倉庫で保管されていたと推測する。

平成2年(1990)に農業館の建替えて、倉庫に保管されていた木曾谷模型が発見され、木曾へ戻ることになるが、当時の福島営林署において木柵・骨格材の補修・着色等の修復後、当該庁舎(現在の御料館)で展示された。その後は木曾福島町の教育委員会の管理となって福島郷土館に移設展示されたが、蘇門会(木曾山林高校の同窓会)の要請で旧木曾山林高校・資料館に移設し展示したが、御料館の開館に併せて再び移設して展示することになった。

木曾谷模型は、140年間の移転の度に組立と解体を10回以上繰り返したが、主要な部材に大きな損傷や歪みも無く、木曾ヒノキの耐久性が優れていたことが幸いしたと考える。

8. 考察

明治維新後の混乱で乱伐・盗伐が横行して山林が荒廃し、明治政府による山林原野の所有区分を明確化する官民有区分が実施されている中、木曾の官林においては、ドイツに留学して林学を学び帰国した松野^{はざま}礪が、明治9年(1876)3月に駒

ヶ根村(現在の松町)の小川入官林に入って官林伐採計画を立て、直ちに実行に移した。江戸時代に尾張藩が行っていた「ひとつの事業現場で年間5万尺の生産をし、名古屋の白鳥貯木場まで運ぶ」という標準ノルマに挑戦した。その結果は翌10年(1877)4月、白鳥貯木場に到着した木材は4万5千本余り、材積で3万2千尺であった。予定した5万尺には届かなかったが、この伐採事業で木曾川を使って木曾材を名古屋まで運ぶルートが、尾張藩時代と同じように使えることになるという大きな成果が得られた。

明治12年(1879)からは、同じ小川入官林で宮城(明治宮殿)建設用材の木曾ヒノキの伐出も始まった。さらに明治13年(1880)に山林局本局の高島得三・田中穰が木曾地方の木材資源の調査に入り、10月に『岐蘇官林報告』が提出された。これは地元の老練な柚頭に伐採に値する木数を鑑定させたもので、木数836万本、材積にして1,042万尺という巨大な数値が出された。

以上が木曾谷模型を制作する直前の木曾官林の状況であるが、全国の官林の中で資源的に恵まれ、尾張藩の時代からの柚や日用の労働組織がしっかり機能していることから、全国に先駆けて「官」として木材生産をやれるという自信を持ち、それを天下に明らかにしようではないかという浩然の気が山林局の本局および木曾出張所に生まれたことが、巨大ジオラマの制作の動機になったのではないかと推測する。

木曾谷模型のジオラマとしての評価は、現代の科学技術からみれば精度は低いものであるが、それは当時の測量・地図の水準から見ればやむをえないものである。しかし、木曾ヒノキを材料として地形を彫刻するという方法は他に例をみないものであり、山岳地形が迫力をもって展開している模型は観覧者に感銘を与え、これは制作者の嘉左衛門の個人的な感性と技量によるところが大であるが、江戸時代に木曾材木役所がおこなった木曾全域の測量と、それにもとづく絵図の存在も極めて大きく、これらの絵図がなかったらジオラマは誕生しなかったと思う。

制作された明治13年(1880)という年代を考えれば、文化財としての価値が評価されて然るべきであろう。そのためには、各部材の大きさ・重量・形状・写真のデータが無いことから、将来木曾谷模型を分解する機会があればその調査を行い、部材表と組立図を作成し記録することを要望したい。また、着色剤の分析調査や3Dレーザースキャンなどの高度な調査も提案する。

9. おわりに

木曾谷模型の140年の時を経ても当時と変わらない姿は、木曾ヒノキの優れた材質を証明した。当時の絵図に正確性を求められなかったものの、それ以上にその迫力ある姿が際立っているが、博覧会で大勢の観覧者に見せるためには大きく作る必要があったと考える。その根底には、内務省山林局の存在と木曾谷官林の

誇示、さらにそこから産出する木曾ヒノキを周知することが目的にあったと推測する。

木曾谷模型の発案者と、元になった地図や絵図は特定できなかったが、その発想は内務省山林局と木曾出張所の職員たちであることは間違いなく、木曾出張所が業務で利用した地図や絵図がその参考になったと考える。

木曾ヒノキと御嶽山と共に生きてきた木曾の風土と歴史が、この木曾谷模型を生み出したと思っている。木曾谷模型は、実際に見ることでその巨大さと山並みのもつ迫りに圧倒されることから、是非とも御料館を訪れて実体験して貰いたいと思うのである。

木曾谷模型の140年の歴史は、その制作から現在に至る全容を解明できたわけではなく、今後、さらに調査研究が進むことに期待したい。

最後に、この研究報告のために、写真の加工・図面の作成・絵葉書の提供等で協力してもらった当館スタッフの中畑孝史氏に感謝申し上げる。

参考文献等

安藤茂良（2007）近世木曾材の伐木・運材の史料について（上）．徳川林政史研究所研究紀要第41号

生駒勘七（1975）木曾の庶民生活．（株）国書刊行会

生駒勘七（1966）御嶽の歴史．宗教法人木曾御嶽本教総本庁

萩野敏雄（1975）戦前期における木曾材経済史．農林出版（株）

萩野敏雄（1971）明治期における官林経営の基本過程(1)～(5)．林業経済 24 巻第 1 号,第 4 号,第 5 号,第 6 号,第 9 号

木曾山林資料館（2020）木曾谷模型の平面図作成について．木曾山林資料館研究紀要第 1 号

山林局木曾出張所（1880）（明治十三年）博覧会一件録．国立公文書館つくば分館所蔵

山林局木曾出張所（1880）明治十三年度第二博覧会経費受払簿．国立公文書館つくば分館所蔵

山林局木曾出張所（1880）明治十三年七月博覧会出品経費精算簿．国立公文書館つくば分館所蔵

菅原尋清他編著（2009）木曾のおんたけさん．（有）岩田書店

鈴木一義・田辺義一（2009）江戸初期の方位及び角度の概念から見た測量術の形成についての一考察．国立科学博物館研究報告 E 類(理工系)第 32 巻

田原昇（2006）近代木曾林業と第二回内国勸業博覧会．徳川林政史研究所研究紀要第 40 号

高島得三・田中穰（1880）木蘇官林報告．国立国会図書館デジタルコレクション

東京大正博覧会案内編集局編纂（1921）東京大正博覧会観覧案内．国立国会図書館デジタルコレクション

森田孝太郎（1969）木曾の明治百年．千村書店

山下和正（1998）地図で読む江戸時代．柏書房